新しい 21世紀のみなと

臨海都心部（みなとみらい21）・京浜臨海部・新横浜都心

1 臨海都心部 ――みなとみらい21

市民が名付けた「みなとみらい21」

「みなとみらい21」――今や横浜のみならず全国的に有名になった「MM21」とも略称されるこの臨海都心部の再生プロジェクトの愛称は、事業が公表された昭和56年に、市民からの公募によって名づけられたものだ。

総応募点数2292点の中からこの愛称が選ばれたのは、「ひらがな」を用いた意外性と新鮮さ、また市民に親しみやすい語感のよさが決め手だったという。ちなみに本来は、「横浜都心臨海部総合整備計画」という事業名だった。

「みなとみらい21事業」は、関内・関外地区と横浜駅周辺地区とに二分されていた横浜の二つの都心を有機的に結びつけ一体化するため、それらの中間に立地していた造船所を移設したうえで港湾機能を再整備し、横浜の都心を拡大強化することを目的として計画された。

事業が実際に着手されたのは昭和58年。事業地区面積は、埋め立て地も含めて約186ha。横浜駅から桜木町に至る海側のエリアに立地する。地区は大きく分けて「横浜駅東口地区」「中央地区」「新港地区」の3つから成る。ここに、業務、商業、文化、コンベンションなどの多様な機能を集積し、市民の就業の場や賑わいの場を創出する事業を推進している。

現在のみなとみらい21

90年代に急速に進んだ街区開発

横浜を紹介したり、横浜を舞台とするテレビや映画などでの「みなとみらい21地区」の登場する機会はきわめて高い。それだけに、私たちはともすれば「みなとみらい21」の風景がはるか以前から今のようであったと錯覚してしまう。

しかし、「横浜博覧会（YES 89）」が開催された平成元年（1989年）当時のことを思い起こしてほしい。市政100周年・開港130周年を記念したこの博覧会で、「みなみらい21地区」ははじめ

みなとみらい21地区

て世間にデビューすることとなった。

横浜館を始め、さまざまな企業や公共のパビリオンがにわかに中央地区に林立したが、当時この場所に存在していた恒久的な施設は、横浜美術館と日本丸・マリタイムミュージアムくらいのもの。博覧会が終わり、パビリオンが取り壊された後には、しばらくの間、未だ造成中の広大な用地が横浜港に向かって広がっていた。

すなわち、クイーンズスクエアやワールドポーターズはもちろんのこと、ランドマークタワーもパシフィコ横浜やみなとみらいホールも、そしてその他のオフィスビルやホテルや商業ビルも、現実に整備されたのはここ10年のことなのである。

その意味で「みなとみらい21地区」は、いまだ発展中のエリアなのだ。

人の賑わいを生み出す「みなと」
―MM21地区の魅力

みなとみらい21地区の「みなと」としての魅力は、とにかく人を集め、都市としての賑わいを生み出す並外れた能力を持っているということである。

みなとみらい21地区の年間来街者数は約3500万人。地区内の企業活動や個人消費額は年間約7420億円、市内経済への波及効果は年間約4400億円にものぼる。

平成11年度調査で「みなとみらい21地区」の来街者の居住地を見ると、約6割が横浜市内で、「その他県内」が約2割、「東京都」が約1割強となっている。また、男女の比率は女性が約6割、男性が約4割と女性の方が高い。

来街者の年齢層は30歳代が28・5%と最も多く、以下、20歳代が21・8%、40歳代が15・2%と、みなとみらい21地区が若者をはじめ幅広い年代に支持されるまちであることが調査からもわかる。来街の目的は「ショッピング」が36・1%と最も多く、「見物・観光」、「ビジネス・業務」、「イベント」の順で続く。

また、リピーターが多いのが特徴で、10回目以上が約4割にのぼっている。さらに、周辺地区への立ち寄り率をみると半数以上が周辺施設に立ち寄っており、横浜駅周辺や桜木町・野毛周辺、横浜中華街周辺の立ち寄り率が高くなっている。

●みなとみらい21の街づくりのあゆみ

2000

2000(平成12)年【10月】●クロスゲートオープン

1999(平成11)年【5月】●横浜メディアタワーオープン【9月】●横浜ワールドポーターズオープン ●運河パークオープン ●赤レンガパーク(一部)オープン【10月】横浜国際船員センター「ナビオス横浜」オープン ●グランモール公園全面オープン

1998(平成10)年【6月】●横浜みなとみらいホールグランドオープン1997(平成9)年【7月】●クイーンズスクエア横浜オープン●日石横浜ビルオープン●汽車道オープン

1995

1994(平成6)年【4月】
●パシフィコ横浜国立横浜国際会議場オープン
【6月】●三菱重工横浜ビルオープン

(平成4年1月)

1993(平成5)年【7月】
●横浜ランドマークタワーオープン
【9月】●横浜銀行本店オープン

1991(平成3)年【7月】
●パシフィコ横浜オープン

横浜博覧会(YES'89)開催(平成元年4月)

1990

1989(平成元)年【3月】
●横浜博覧会(YES'89)開催(10月閉幕)
●臨港パーク(一部)オープン
【11月】
●横浜美術館オープン

1988(昭和63)年【7月】
●みなとみらい21街づくり基本協定締結

1985

(昭和60)年【4月】
●日本丸メモリアルパーク(一部)オープン
帆船日本丸の一般公開開始

1983(昭和58)年
【11月】●みなとみらい21事業着工

(昭和58年3月)

1980

(昭和55)年【3月】
●三菱重工業(株)横浜造船所の移転が決定

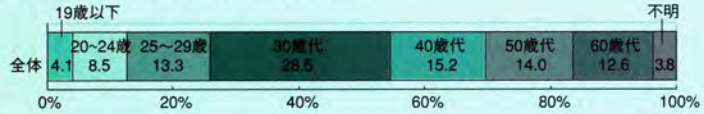
●みなとみらい21の事業効果(平成12年)

就業人口 約5万人
来街者数 約3500万人
進出企業数 約850社
市税収入 約110億円

●横浜市内経済への波及効果(平成11年度)

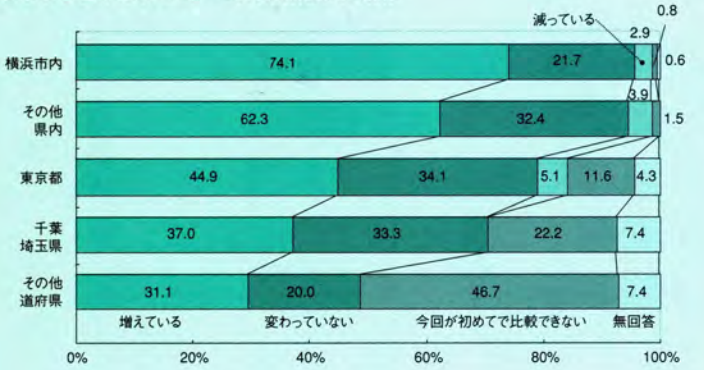
建設投資による効果 約1兆8500億円(累計)
事業活動による効果 約4400億円(年間)

●「みなとみらい21」の来街者：年齢別

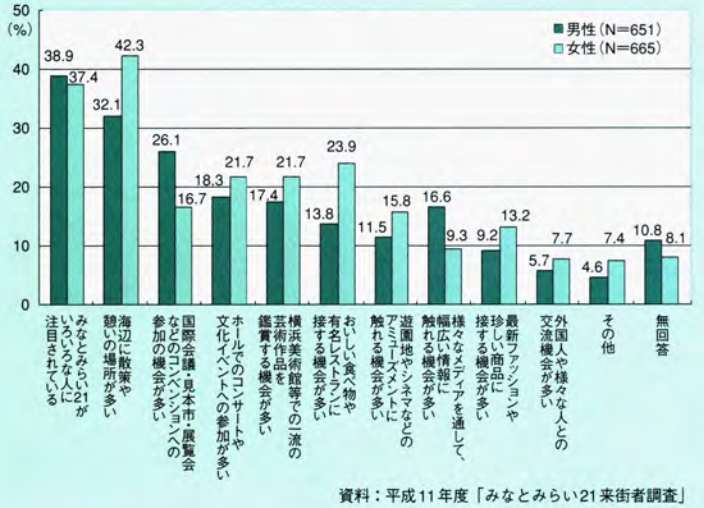


●「みなとみらい21」の来街割合：居住地別

●「みなとみらい21」への来街頻度の増減



●来街者に聞いた「みなとみらい21」の魅力



資料：平成11年度「みなとみらい21来街者調査」

横浜トリエンナーレ2001：横浜トリエンナーレは、3年に1度開催される現代美術の国際展。第1回展は、平成13年9月2日から11月11日までパシフィコ横浜と赤レンガ1号倉庫をメイン会場に開催され、入場者は約35万人にのぼった。

今後ますます元祖「みなとまち」である周辺地区との回遊性や一体性を高めることで、新旧両方の魅力を併せ持つ懐深い横浜の臨海都心部を形成していくことが期待されている。

業務・コンベンションなど国際業務拠点の形成

みなとみらい21地区は、単に業務機能を集積しただけの都心にはなっていない。東京・丸の内は夜や休日は人が少ないが、みなとみらい21地区には夜も休日も人が集まる。

業務機能をはじめ、独自の魅力的なコンベンション・商業・観光・文化機能をバランスよく集積する国際業務拠点の形成をめざした都市づくりが実を結びはじめたのである。それを裏付けるように、みなとみらい21地区の就業者の6割が、文化・情報面でみなとみらい21地区に魅力を感じているという。

特に、魅力的な点としては、「みなとみらいがいろいろな人に着目されている」（38・1％）、「海辺に散策や憩いの場が多い」（37・3％）が上げられ、以下「コンベンションへの参加の機会が多い」（21・4％）、「ホールでのコンサートや文化イベントの参加の機会が多い」（20・0％）となっている。

なにしろ、24時間活動する国際文化都市を目指す都市づくりである。パシフィコ横浜に巨大バッタのオブジェが出現しても、開発予定地でサーカスが開かれていても誰も驚かない。オフィスビルだけの息の詰まるような空間ではなく、職・遊・学・住が一体となった場所。それこそ暮らしやすい街・横浜の都心にふさわしいまちづくりと言えるのではないか。